

# 転生少女の霧隠し

星月 悠

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気まぐれ更新になると思いますが  
いつか消えるかも

目次

幼少期〜原作前

1話

2話

3話

1

8

15

## 幼少期〜原作前

### 1話

気が付いたら転生していました

正直言うと俺も何が何だか分からないが、目を開けると知らない天井が視界いっぱい映っていた

身体を起こすと明らかに子供の身体が視界に入る。思わず手とか動かしたり自分の顔をぺたぺたと触ったりする。首を横に向けるとちょうど鏡があり、そこにはキリツとした目つきながらもあどけない幼女がこちらを見ていた

鏡に近づくと、鏡に映った幼女も近づくと大きくなる

……なんで俺幼女になってるの!?

とりあえず俺の前世(?)を紹介しよう

俺は普通の会社員であり、主にコンピューター関連の仕事が回ってきていた

趣味はパルクールでインドアとアウトドアどっちつかずの生活をしており、大きなプロジェクトも終わってやれやれと思いつつベツドに入って寝た……はずだった

あれれ〜おかしいぞ〜?……俺過労死する程働いた記憶無いんだけどな。会社も至ってホワイト企業だったし幼女になる要因もない

あ、俺が死んだと思つたのはね、

「蒼空ちやくんどうした〜?」

「蒼空、どうしたの?」

両親と思わしき二人が俺を呼んでいるからだ。女性は生まれて数ヶ月の赤ちゃんを抱いていた

「ううん、なんでもない」

無反応では不審がられるから全力の笑顔を向けて答えた。俺前はフツメンだったからなく。ここまで顔が綺麗だと将来モテるんだろ

うなどほぼ他人事のように考えてると、父親の方が近づいてきて俺を抱き上げた。イケメンだなオイ

「ごめんね、ずっと凜りんばかり構ってたから寂しかったんだよね」  
そういう訳じゃないんだけどな。まあ身体は幼女だし多少甘えな  
いと可笑しいよな。中身三十手前の男だけど

父親の肩におでこをくつつけてグリグリとすると、さらに包み込む  
様に抱き締めてくる

身体は父親って事が分かってるからか安心感がある

俺はその微睡みに逆らうこと無く目を瞑った

\*\*\*\*\*

俺はどうやら今アメリカに住んでいるようです。国籍は日本だけ  
どね！

今日は父の元仕事相手に会いに行くようだ

俺は今四歳のようにまだ親に色々世話してもらわないといけない  
年だ。スカート嫌だなくと思っていたら、置いていたのはショートパ  
ンツ。記憶無い時もスカートは嫌いだったようだ。俺的にはラッ  
キー☆

懐かしのチャイルドシートに乗せられて走ること数十分、一軒家に  
到着した

……ん？何かこの家見覚えがあるような。幼女の記憶に関わらず  
だけど

父に手を引かれ、玄関前でチャイムを鳴らそうとすると庭のところ  
から何かを打つ音がした

父の顔を見ると、苦笑いを浮かべてそちらを見ていた

その後すぐ、黄色いボールがでてんとこちらに転がってきた。父  
の手から離れそのボールを拾うと重さのない軽やかな足音が聞こえ  
てきた

「……だれ？」

そこにいたのはぶかぶかの白い帽子を被った“テニスの王子様”

の主人公である越前リョーマとその兄リョーガが幼い姿でそこにいた

……まさかの転生トリップでしたか　ありがとうございますませんでした

「よお！二人目出来たんか！」

「まあね。というか相変わらずだね」

「い、いいじゃねーか別に！リョーマだって楽しんでるし」

「あらく可愛いわね〜」

「赤ちゃんはみんな可愛いわよ〜」

父達は軽口を叩きあいながらも楽しそうに談笑しており、母達も凛ちゃんを中心に話している。俺達子供は完全に置いていかれている

さて、どうしよう。二人とはとは初対面……になるんだよな　多分

「よっ、俺とは初めましてだよな

俺は越前リョーガ。よろしくな」

「……えちぜんリョーマ」

「……あさぎりそら。よろしく」

ちっちゃい子の挨拶の仕方とか知らん。取り敢えず笑っておけば困らないのは学習済みである。リョーガがこつちをじつと見つめてくるので、こちらも見つめ返すと突然ニヤリと笑った

わけがわからず眉を寄せると手を握られて引っ張られた。突然だったけどバランスを崩すことなく走る事が出来たので内心安心しつつもリョーガの背中を見る

後ろからはリョーマの足音らしき音もするのでついてきている様だ

すぐに庭のような所に出た。そこはテニススコートの縮小版のような場所だった

大人しくついて行くとリョーガがテニスラケットを持ってきた

「テニスやろうぜー！」

「え、でもおれやったことない……」

「大丈夫だつて！」

絶対大丈夫じゃない。知識しかない上に俺まだこの身体上手く使えねえつてのに

急かされるままりヨーガとコートを挟んで立つ。リヨーガの持ち方を見様見真似で握ってみるが、この身体にはやっぱり大きいラケットだ。リヨーマ程アンバランス感はないが正直どっこいどっこいだろう

地面から踵を離したり付けたりを繰り返したりと身体をほぐしていると父達が後ろから来たのが見えた

思わず振り向くと両親が驚いた顔でこちらを見ていた。まあ娘が突然こつちを向いたら驚くよな普通

……これって驚イーグルアイの目とか鷹ホークアイの目の類の目だよね多分

目を瞑って深呼吸してから目を開けると後ろが見える事はなくなつた

「いくぜー！」

「！」

リヨーガがサーブを打つたのを見てから走るとグンと予想以上のスピードが出た

突然の出来事に驚くがバランスを取って立ち止まる。サーブはもちろん俺の目の前を過ぎていった

ボールを追いかけて拾い、リヨーガの方を見ると目を見開いてこちらを見ていた

え、なんでそんなこつち見てんのさ。そんなに見ても何も出ないよ首を傾げながらボールをリヨーガに投げて渡す。あんまり飛ばなかつた

もう一度構えるとリヨーガがニヤリと笑つた

何かやる気だ。というか嫌な予感しかしないんだけど  
パンツ

リヨーガがさつきよりスピードのあるサーブを打つた。さつきと同じように踏み出すと比較的簡単にボールに届いたのでラケットを両手で振り抜いた

ややラケットが上向きだったのかロブになってしまった。それは

リョーガのチャンスボールとなりスマッシュを打たれた

でも、ボールを打った感覚は何か新しいものを見つけた時のワクワク感を感じさせた

自然と口角があがっていく

リョーガも笑ってサーブを打つ。それに追い付いて打つのが精一杯でコントロールもへったくれもないが、ラリーが少しでも続くと嬉しくなる

……楽しい！

まだ終わってほしくない まだテニスをやっていたい

俺達だけで楽しんでいたからかりョーマが「おれもやる！」とコートに入ってきた

俺はリョーマに手招きしてこちらのコートに入るように促した

リョーガは依然として余裕のある笑みを浮かべるので、リョーマの耳に口を近づけてひそひそ話をした

「おれががんばって返すからリョーマがボレーして」

「ぼれー？」

「ネットきわで叩くボールだよ。ちからいっぱい打てば点数取れるから」

頑張る？という素直に頷いてくれた。原作でのあのツンツンは何時からなんだろうか

可愛いなく同い年だけど息子見てる気分だぜ。俺より小柄だから余計に

リョーガのサーブの打つ面に立ちリョーガと向かい合う

パンツ！

リョーガのサーブを見て何処に打てばいいのかを頭をフル回転させて考え抜いたコースへと狙いを定めて打った

「はあっ！」

狙った場所よりずれたがリョーガを驚かせるには十分だったように、ネット前のボールを打ってきた。もちろんそこにはリョーマがいて

「てやっ！」



リヨーマがリヨーガのボールをコートに叩き入れた。リヨーガはそのボールに間に合うことなく2バウンドして止まった

二人はしばらくほうけていたが、リヨーガが笑いながらも悔しそうな表情をしたのを見てリヨーマがこちらを振り向いた

俺がニコリと笑うとリヨーマは実感がやつときたのかキラキラとした笑顔を見せた

「リヨーガから点とったー！」

「やったじゃんリヨーマ」

「やりやがったなチビ共」

「チビじゃない！」

リヨーマと喜んできるとリヨーガがコートネットをこえてこちらに歩いてきた

リヨーガが俺も込みで押揃うが反応したのはリヨーマだけであり、俺はその光景を笑ってみていた。原作でも滅多になかった越前兄弟の戯れだから見れて嬉しくてしょうがない

「こんどは一人でやる！」

「じゃあおれは見てるから頑張れ」

流石に疲れたから休みたい。ラケットを抱えてコートの外に出ると父が近づいてきた

あ、楽し過ぎて忘れてた。怒られるかな……

「テニス、楽しかったかい？」

「うん！たのしかった！」

テニスが楽しかった事は事実であるので笑顔で答えた。途端にへらつとした笑みを浮かべたのである、これは怒ってないなどすぐに分かった

母もあらあらと優しい顔をしてこちらを見ていた

越前父もこちらに歩み寄ってくるとう頭をグリグリと撫でてきた。首が揺れて痛いから勘弁して下さい

「お前いいセンスしてんなー！」

「女の子には優しくしなさい南次郎！」

「え!?女なのかこいつ！」

失礼な。確かに一人称は俺だし顔も服装も中性的だから間違えそうになるのかもしれないけど。女の子としては傷つく台詞だからな。奥さん逃がすなよこんにやろう

でも俺は何も言わずにただ静かに越前父を見上げる

越前父は俺を見るとリョーガと似た悪戯っ子のような笑みを浮かべるとその言葉を放つ

「お前さん、テニスやるか？」

その質問に考える時間など俺には必要なかった

「やりますー！」

俺は原作の事など頭からすっぱ抜かしてしまったまま答えた

だがその答えに俺は成長しても後悔などしないだろうと頭の片隅にふと思った

## 2話

越前父――南次郎さんにテニスを教えてもらおう事になった

世界1位の選手に教えてもらえるとかどんだだけ優良物件なんだ!!  
知り合いだったお父さん Good Job!

しばらく打ち合ってた越前兄弟がこちらに気づいたのかラケットを持ってこちらに走り寄ってきた。二人にテニスが一緒に出来ることになった旨を伝えると分かりにくく喜んでくれた

人の表情から気持ちを読み取るのは得意だからな!!(仕事で人の顔色伺う事もあったし)

「お前本当にテニス初めてかよ」

「やったのははじめて」

「おれのほうがせんぱい?」

「うん」

俺がそう言うとりョーマ(越前だとややこしいから)はペアと耀か  
んばかりの笑顔を見せてきた

ううっ、可愛い……。肉体年齢では同じ年だけど俺の中の何か  
が浄化されそう

俺が無反応だったからかりョーマがこちらを見上げてくるので、俺  
はりョーマに手を出した

リョーマはすぐに握手だと分かったのかギョツと握ってきた

ここで頭を撫でてしまうとリョーマの機嫌を損ねるので頭を撫で  
るのはもうちよっと仲良くなつてからだな。俺も二人と仲良くなり  
たいし

「ソラー」

「?」

リョーマが俺の腕を掴んでコートの方へ引っ張っている。私の方  
が身長が高いので動く程でもないが、遠慮なく引っ張ってくるので若  
干痛い。勿論顔には出さないけどね

「こんどはおれとやるの?」

「打ちながらのほうがおぼえられるってとおさんがいつてたから!」

南次郎さん。俺はそんなんじゃないやありませんよ。って教えてあげてくださいよ。俺まだまともな握り方も出来ないんですけど!?

それをオブラートに包んでリヨーマに伝えると、今度はリヨーマが「俺が握り方教えるから」と言ってる。リヨーマの援護をした

……そこまで言われると断れないじゃないか!

俺はリヨーマに引つ張られるままにコートへと走っていった

後ろの両親達がどんな顔をしていたのかを見ないままに

\*\*\*\*\*

南次郎 side

「……なあ、あいつホントにテニス初心者なのか? そうとは思えねえんだが」

「いや、蒼空はほとんど家で本を読むか走ったり高いところに登ったりしてた位でテニスをやってる様子は無かったな」

「高いところって危ねえなおい」

幸乃さん二人は赤ん坊がいるのもあって先に家に戻ったが、俺達は息子二人と蒼真の娘(男子にしか見えねえ)がテニスラケットを持ってボールを打つのを少し離れた所から見ると

蒼真は親バカ全開で娘を見てデレデレしてるように見てるが、その目は真剣そのものだ

蒼真の娘……確か蒼空だったな。握り方は今リヨーマ達が教えて握っているが、最初リヨーマと打ち合った時に既に握り方が出来ていた

初心者らしく拙い部分もあるが、現地点リヨーマと実力は近いんじゃないか?

リヨーマのボールに追いつける脚力とラケットを振り抜く腕力、それにボールを視認する動体視力、しかも今はそうでもねえが油断したら見失いそうな程の存在感の薄さ

どれも遊びで得た力と言えどテニスをやる上では強力だろうな。立派な武器になる

「あ、そう言えば蒼空が今度複合武術の道場に行くって言ってたな」

「はあ!? 何でだ!」

あいつ女だろ? しかもテニスやるつつつてるのにその上習い事増やすって大丈夫なのかよ

ほぼ毎日こっちに来ることになるんだぞ

「僕が勧めたに決まってるだろ! 蒼空は可愛いしもし不審者なんかに捕まったときに自衛できないとじゃないか!!」

「お前バカだろ!!」

心配性にしたって過保護だろ! この辺は治安比較的良好だろうが。そのうち嫌われんぞ

俺がそう言うとき蒼真は「僕の娘はそんな事言わないもーん」と若干拗ねた声でツンと顔を背けた。これで三十前半とか可愛くねえだろ

でもすぐに蒼真は子供<sup>ガキ</sup>どもの方を向いた。その顔は真剣だが目が心配だと言っている

あんだだけ才能あれば周りが放っておかねえ。それこそ公式戦に出ればマスコミが黙ってねえだろうな

子供<sup>ガキ</sup>どもを見るとときやらきやらと子供特有の高い声で笑いながらラケットを一心不乱に振っている。あれ見ると俺もテニスやりたくなってくるぜ

その心の声が聞こえたのか蒼真がジトつとした目を向けてきた。お前のその読心術止めろつつつてるのに聞きやしねえ。娘にも受け継がれてんじゃねえだろうな……

「蒼空には信用ならない人にだけ使う事を条件に教えてるよ。だって今は僕達の事を気にしてるだけでこちらの会話を聴いてる感じじゃないもの」

「……将来は蒼真二号か?」

「まさか。南次郎だつて彼らをそうしたいの?」

「それこそ冗談だ。あいつらには俺を超えてもらうからな」

お前なあ……と呆れた顔を向けられたが、すぐに苦笑いへと変わった

俺だつて父親だ。あいつらは俺の事なんて関係無く育ててほしいんだつて事が分かるんだろうなこいつ

向こうではリョーマがバテたのか肩で呼吸をしてラケットを構えている

リョーガはそれをネット越しで見ているが、蒼空は何を思ったのか靴を脱いで窓から俺ん家に入っつていった

家の中には赤ん坊もいるし騒ぐことはねえと思っつて見ていると、小さな水筒を持って出てきた。リョーマの方に走り寄りそれを渡すと飲むように言った。リョーマは最初拒否してたが蒼空のやつに説教じみた事を言われると渋々水筒を飲んでいった

リョーガが俺には？と寄ると蒼空は準備してたのか抱えた水筒の一つをリョーガに渡した。全員分ちやんと持つてきたようだ

……しっかしあれ見てつと、

「誰が最年長か分かつたもんじゃないね」

「心を読むな。つたく……」

あの三人は外見だけだとリョーガ、蒼空、リョーマの年齢順に見えるが、リョーガの気づかなかつた所やリョーマの素直じゃねえ所をフオローしてるのを見てると蒼空が最年長に見えてきやがる

しかも本人の表情筋が硬いのか滅多に笑わない。テニスを楽しんでいると言ったときもふわつとした笑い方で子供の満面の笑みとは違ったものだった。元々笑う奴じゃないのは蒼真から聞いてたが想像以上だ。寧ろあの二人が蒼空が楽しんでるのが分かつてるのがビツクリだ

今はまたリョーガ達でやって蒼空がコートの外で応援してるが、少し口角が上がってる位だ

でも、蒼空は子供を見守る親のような慈しみのこもつた目を二人に向けていた。四歳がするようなもんじゃねえが、こいつらは気にもしねえんだろうな

「さつて俺も乱入してきますかねえ」

「うっわ、南次郎鬼だな。習いたての蒼空もいる中に行くとか」

「何事も実践だつっのー！」

俺がラケットを持って立つのを見て蒼真が呟くが、俺はお構いなしに歩み寄つてく。蒼真もやれやれと溜め息をつく俺の後ろをつい

てきた

俺達が近づいてくるのが分かったのか蒼空がこちらを向く

俺はその目を見てニヤリと笑った

「ほれ蒼空くやるぞー」

蒼空は目を丸くしてパチパチと瞬きするとしばらくして頷き、ラケットを持ってリヨーガ側のコートに走っていった

育てがいのある奴が増えるのは面白みも増えるからな！頑張れよ

\*\*\*\*\*

南次郎さんの所でテニスを習う傍ら複合武術の方にも参加をする  
毎日

正直言つて幼女がやるペースじゃない。しかもテニスの方は時折泊まり込みになる事がある（集中し過ぎて両親が泊まり込みにしてしまから）

それでも前世<sup>まえ</sup>では絶対経験出来なかった事だから楽しさの方が何倍も大きい。子供の身体だからか吸収力も凄い。子供の頃からの経験値の大切さが身に染みる

「ソラーンこれ見よッ」

「んん？いいよ」

今日も泊まり込みになり子供三人で寝る為のダブルベッドの上でストレッチをしてるとリヨーマが絵本を手に持って寄ってきた

俺が本（小学校中学年位のもの）を読んでも、リヨーマが後ろからのぞき込んできた事があった。その時その本の文字が読めなかったのが悔しかったのかこうして絵本と一緒に読もうと強請るようになった。

毎回の事なのでリヨーガも参加するようになり、読み聞かせのようにして読んでいると途中からお話の内容の事に気がいつて俺が二人を落ち着かせながら読む事が多い

まあ大体リヨーマは寝落ちをしてしまうが、俺とリヨーガは本を片付けてから寝ている

リヨーガは兄だけあってリヨーマを揶揄う範囲をよく分かっている、リヨーマが寝落ちした時はその場で切り上げて最後まで読まないで、リヨーマが機嫌を損ね過ぎる事はない

「……ねたかな？」

「寝たな。俺が返してくる」

「おねがい」

真ん中で寝るリヨーマを見てリヨーガが本を片付けるためにベッドから降りて部屋を出た

隣で寝るリヨーマの寝顔は普段の猫みたいな様子もなくすやすやと幼い顔で眠っている。頬をつつくと子供特有の吸い付くような肌の感触が面白い

「何してんだよ……」

「リヨーマのほっぺつついてる。楽しいよ」

「俺はいつもやってっからいいわ」

しばらく頬をつついてるとリヨーガが呆れ顔でベッドに入ってきた

俺の行動を咎めること無くリヨーマと俺の頭をわしやわしやと撫でた

特に抗うこと無く享受していると眠たくなってきた。うつらうつらとしてるとリヨーガがフツと笑う声が聞こえた

「寝ちまえ。お前もまだ子供なんだから」

「……」

その時自分が何を言っていたのかよく分からないが、その時のリヨーガの顔は寝ぼけ眼でもよく覚えている

\*\*\*\*\*

リヨーガ side

ソラが最近テニスの練習の後家に泊まるようになった。その時にベッドで持ってきた本を読んでいた。リヨーマが後ろからのぞき込むと読めなかったのか、ムスーと頬を膨らませたので頬をつつくと怒られたのを覚えている



その後リョーマが絵本を持ってソラと一緒に読むように強請るようになった。俺も同じ所で寝るから一緒に見てるが、大体リョーマが寝落ちする

その時は俺が本を片付けていくのが普通になった

ベッドに戻るとソラは大概リョーマの頬を楽しそうにつついてる。自分も似たような頬のくせに人をつつきたがるのだ

「何してんだよ……」

「リョーマのほっぺつついてる。楽しいよ」

「俺はいつもやってっからいいわ」

俺はソラの誘いを断って寝てるリョーマとソラの頭を撫でる

ソラは気持ちよさそうに目を細めて俺の手を受け入れる。でも段々眠たくなってきたのかうつらうつらしてきた

「寝ちまえ。お前もまだ子供なんだから」

俺の言葉にソラはふっと目を開けて俺の目を見る。眠たげでもその目には柔らかいものが混じっている

「……リョーマはまだこどもだよ……。たまにはあまえてもいいんじゃない……？」

ソラはふわりと笑みを浮かべ舌足らずに言葉を連ねた。

リョーマと同じ年の子供のはずであるソラは時々自分よりも年上のように感じる事がある

俺はその時多分間抜けな顔をしてたと思う。ソラはふふっと笑うと音もなく静かに眠った

ソラの顔にかかっていた髪を後ろへ撫でるように退けながら人知れず笑みを浮かべる

……こいつには一生適わねえだろうな。テニスの強さじゃなくて別のところで

俺は電気を消してベッドに入った。明日また二人の兄貴としてテニスや日常を送ることが出来るように

### 3話

「なあ、もし俺が居なくなったらどう思うんだ……？」

これはもしかしたら彼なりの小さなコールだったのかもしれない

\*\*\*\*\*

越前家にテニスを教わりに行くようになってあつという間に年月が経った気がする。といつてもまだ1年経ったかどうかだけど

俺もやっと見られるテニスになってきた。まだリョーガみたいなプレイスタイルは確率してないけど、「まだ焦る時期じゃねーよ」と南次郎さんに頭をわしやわしやされながら言われたのでとりあえず基礎はしっかりさせようと思つて鏡と睨めっこしながら素振りする毎日だ

今日もランニングがてら走つて越前家に向かう。ちよいちよいご近所さんに挨拶されながら身体に合わない大きさのバックを背負い走り続ける。すると家が視認できる距離まできた時車が止まってるのが見えた

相手は無表情なのに対して南次郎さんはやや苦い表情をしていた。その状況に俺は足を止めてその様子を見るが1分もせずに相手は立ち去ってしまった

なんか見ちゃいけないものを見た気分になつたので南次郎さんが見えなくなつたのを確認して時計を見ながら数分たつたのちに越前家に入った

「こんにちは」

「よお、蒼空。リヨーガたちならあつちだぞ？」

「……うん」

あれを見たあとだから気づける程度だがあまり元気がなさそうに見える。でも俺は見えない振りをしているからその話題を出すわけにもいかないのが大人しくリヨーガたちの方に走っていく

「！ ソラー！」

「よっ、やっとなあ！」

「うん、またせた」

身体は適当に暖まっていたからストレッチを開始する。180°開脚してペタンと身体が地面につくようになったのは日頃のストレッチのお陰だろう。前はこんな事出来なかったから出来るようになった時は思わず「気持ち悪い」とポロッと零したくらいだしな

リヨーマたちの前でやった時はびっくりされたけどリヨーマに何故か対抗意識燃やされて180°開脚は出来なくてもペタンと地面につくようになった。え、原作でもこんな事できたのか？こわい  
充分に身体が解れたのを実感してラケットをバックから取り出す。クルクルと掌や手の甲に乗せたりしてラケットを手に馴染ませるので無駄な行為っぽいけど何となくこれがルーティーンになりつつあるんだよなあ……

「お待たせ」

「こんどはおれがかつぞソラー！」

「うん、まけない」

年齢故に自分より小さいリヨーマにビシツと音がつきそうな勢いで指されたけど可愛いなあ、としか思わない。勿論負けるつもりは全くないけど  
今のところは俺の方が勝ち越し中である。ちなみに負け無しは南次郎さんだ。大人気ないと思わなくはないが、手を抜かれたら腹立つので全力で試合をしてもらえるのは嬉しい。次点でリヨーガ、俺とリヨーマとなる

「ふいつちっ？」

「スムーズ」

「……よし！おれからだ！」

「リヨーガ、審判おねがい」

「へいへい、次勝ったやつが俺と勝負な」

「！ わかった!!」

リヨーマにサーブ権を取られちゃった。と言っても俺は基本的にスムーズを選ぶから完全に回転の結果任せになる。コロコロ変えたって結果がどうなるかなんて分からないし一々変えるのはめんどくさい

リヨーガが次試合してくれるというのを聞いてリヨーマが目を輝かせた。滅多に試合してくれないからなりヨーガは。喜ぶのも無理ない。それでも勝ち譲らないからな

\*\*\*\*\*

「……またまけた」

「そう簡単に勝ちを譲るかよ」

「くやしい。ブレイク出来ない」

「ソラはまだ球がかりーんだよなあ。その分はええけど」

ゼエゼエと肩で息をして呼吸を必死に整える。その反面リヨーガは肩で息をしても俺程疲れた様子はない

リヨーマとの試合は俺が勝った。その後リヨーガは少し休憩時間をくれたし全く疲れが無かったかと言えば嘘になるけどそれを理由に負けたと言うのは嫌だった

リヨーマがとたとたとスポドリを抱えながら走り寄ってくる。差し出されたスポドリを受け取りながらお礼を言っただけで飲み分けた。1回一気飲みしたとき思いつきり噎せたからな。反省を生かしてちみちみ飲んでる

「おいお前ら〜！とつとと風呂入れ〜！」

「！ rock! scissors! paper!」

「1、2、3！」

後ろでリヨーマとリヨーガがじゃんけんしてるのを聞きながら

着替えを持って風呂場に向かう

テニスやった後汗だくになるし風呂に入ってから帰ったらどうだ？と南次郎さんに言われてお言葉に甘えてる状態だ。いつも俺が一番風呂なんだけど何故？と思うのは何時の話だったか

アメリカに湯船というものはないから基本的にはシャワーだけで、日本人としてはやっぱり湯船に浸かってゆっくりしたいと思うのは摂理じゃないか……??

「あがったよ」

「つぎおれ！」

「リョーマがかったんだ。おめでどう」

「おれはテニスでかちたかった！」

「またがんばろう？」

脱衣場で髪を乾かしていると入ってきたのはリョーマだった。俺の言葉にぷりぷりと怒りながら服をどんどん脱いでく。それでもひっくり返したまま洗濯機につっこまないのはいつも言ってたお陰かな

洗面台に置いてあるドライヤーを借りて髪の毛を乾かすが短いからかそこまで時間がかからずに乾ききった

「おつ、あがったか」

「お借りしました」

「相変わらずサラツサラだなおい」

「そう？」

リビングに戻ると南次郎さんがかけてたソファアールから顔だけこちらに向けてきた。南次郎さんに声をかけると近くにいたのかリョーマがタオルを肩にかけたまま俺の髪を触る

髪をいじるリョーマをスルーして冷蔵庫から牛乳を取り出す。我が物顔でこういう風に人様の家電触れるってある意味慣れた結果なんだろうな。みんななんだかんだで警戒心は強い方だろうし

「リョーマ！次！」

「おー、今行く」

「リョーマ、それじゃあ風邪ひく。乾かしてきて」

「え、……わかったよ」

パタパタと濡れた髪のまま入ってきたリョーマと入れ替わりに出ていったリョーマを横目に乾かしてこいと言うと不貞腐れながらもリョーマはまた洗面所に戻っていった

……今ここに居るのは南次郎さんと俺だけだ。表情の指摘くらいは出来るか？

「……南次郎さん」

「おう？どうした？」

「……」

話しかけた時の様子は至っていつも通りに見える。自分の気の所為じゃないかと思うくらいには

でもやっぱり着く直前のあの表情は気になる。あんな南次郎さんの表情初めて見たから

「……何かあった？」

「……」

洗面所からのドライヤーの音とシャワーの音だけが響く。俺は黙ってこつちを見る南次郎さんから目を逸らさずただ黙っていた

どのくらい経っただろうか。南次郎さんは徐に息をついた。そしてのと俺に近づいてきたのを静かに待つ

俺の手が身体に触れるくらいまで近づいた南次郎さんは俺の目を見てふっと表情を緩めた。俺はその表情の意味が分からず首を傾げた

「……なんでそう思った？」

「……今日あったとき、元気がなさそうだった。ぐあいが悪いとかそういう感じじゃなかったから、気になった」

とりあえず見ていたことを隠したまま感じたことを言った。どうか何ともまあ可愛げない言い方だな自分で言っただけだ

俺の言い分を静かに聞いていた南次郎さんはぽんぽんと俺の頭を叩くように撫でた

「……蒼空にはまだ早い話だ。気にすんな。賢いお前には何となく分かっただろうけどな」

「……………そう」

それだけで分かるか。原作知ってるから何となく分かっただけで選択肢多すぎるわ。

まあ記憶通りなら十中八九リョーガの事だろう。ということはあるのはあの人はリョーガの引き取り手の代理人つてところか？

俺は南次郎さんの言葉で追求するのをやめた。ずっと会えるわけじゃないのは理解してるけど寂しい気持ちは変わらない。ましてや別れが必ず来ることを知らないリョーマには酷な思いをさせるだろう

「かわかしてきたぞ……………どうしたの？」

「今日ダメだったところを聞いてた」

「あ！おれもやる」

今度はちゃんと乾いた髪をゆらしながらリョーマが入ってきた。俺たちを見て不思議そうな顔をしたけど咄嗟に出た俺の嘘にとびついてきた。南次郎さんはさっきの様子を引っ込めてリョーマを今まで通りにからかっていた

「おめーらはまだまだだよ！そんなんじや俺にはぜってー勝てねえな！」

「う、うるさいやい！」

「(全く……………)」

俺はじゃれ合ってる2人を放っておいてテレビを見る。ただのニュース番組だから面白みは欠けるが外のことを知るのも悪くないと思う

しばらくすると騒がしさが増した気がして声の方を見ると、風呂をあがったのかりョーガもその絡みに参加していた。こうして見ると本当に仲の良い家族だと思う

「……………人生ままならない事もあるけど」

家族と離れ離れになって寂しく悲しいと思うのは幾つになっても変わらないよね

「今日も泊まってけ！」と俺の両親に交渉して珍しく勝った南次郎さんが笑顔でそう言った。待て、俺の着替えはどうするんだと思ってる、服が一通り全部用意されていた。どうやらいつ勝っても良いように準備をしていたらしい。おいおい……

「……サイズは確かにピッタリだけど」

「それ男物じゃねーの？」

「だよなあ……」

南次郎さんに渡された服はどう見ても男児用のものだった。いや別にそれは構わないけども。元々は男だし

何だかんだで動きやすさはバッチリな服をもらうことになった。いつものリョーマ達との読み聞かせをしようと思ったら、リョーマが既に撃沈していた

「リョーマが寝てる」

「チビ助も疲れたんだろ。まだまだなあ」

「まあ仕方ないんじゃない？」

つんつんリョーマの頬をつつきながらニヤツと笑ったりリョーガを横目で見ながらリョーマの頭をさらつと撫でる。本人の気質に合った猫っ毛な髪は指の間をすり抜けパサリと元の場所に戻る

「……ソラ」

「……？」

「なあ、もし俺が居なくなったらどう思うんだ……？」

「……寂しい」

「！」

「リョーマとリョーガに出会って1年になると思うけど、いつも3人で一緒だったでしょ？だからリョーガが居なくなるとなんか……ぽっかりした感じがしてやだ。居なくならないでほしいよ、俺は」



「……そっか」

俺の言葉にホツとした表情をして答えたリヨーガに何となくこの質問をした意図を察したと思う。リヨーガの顔を真っ直ぐ見るとリヨーガも俺と目を合わせてくれた。

「……リヨーマに“寂しくない”とか“どうとも思わない”って言われた？」

「……」

目を逸らしたリヨーガの反応に「やっぱり」と思いながら、それを言ったリヨーマは素直じゃないと思って笑ってしまった。

「リヨーマも寂しいよ。リヨーガが居なくなったら」

「……でもチビ助は」

「リヨーマは分からないんじゃない？リヨーガが居なくなることが」

リヨーマはまだ5歳だ。別れを経験してないのだから、“親しい人が居なくなる”ことも想像が出来ないんだろう。リヨーガもその考えに行き着いたのか若干渋い顔をしていた。

「……本当に居なくなるの？」

「……分かんねえ。俺が言っても変わるか分かんねえし」

「言ってみれば？ワガママ」

「それが出来たら苦労しないっての」

「……じゃあ今度写真撮ろう？リヨーガのこと忘れないように」

というかりヨーマもあの事故が無ければ多分リヨーガのこと忘れてなかったと思うんだけど。まああの言葉は地味にショックだったろうなあ、と思う。俺も言われたら多分凹む。リヨーガもいた事を思い出せるようにという案を出したら「やだ」って言ったけど、耳赤いの丸わかりだからな。

「いいよ、こっちで勝手に撮るから」

「はあ!？」

「リヨーマ起きるから静かに」

「おっまえ……!」

拳握ってプルプル震えてるけどリヨーマのこと考えてじっとしてるんだからリヨーガもお兄ちゃんだよな。揶揄うのは辞めてやら

ないけど。

「じゃあ俺寝るから。おやすみ」

「……おやすみ」

不貞腐れた声で返されたけどちゃんと返してはくれるんだから嫌いにならないんだよな。

……リョーガの運命が変わってくれればいいな。その時に何が起こるかは分かんないけどさ。ちよつと身体年齢に引き摺られてるのか泣きそうになったの堪えられて良かったわ。

未来は神のみぞ知る、ってね。